

【別添2】

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立土岐紅陵高等学校

学校番号	47
------	----

I 自己評価

1 学校教育目標	1 自己の在り方や生き方を主体的に考えるとともに、思いやりのある人間を育成する。 2 社会で求められる資質や品格を身に付けた人間を育成する。 3 地域社会に貢献できる人間を育成する。		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー (GP) - 基本的な生活習慣、倫理観及び社会的なマナーを身に付け、互いの多様性や人権を尊重し思いやる心と生命、自然、文化を大切にする生徒 - 自己の可能性を信じ、自己を成長させるため、生涯にわたり主体的かつ意欲的、継続的に学習する努力を惜しまない生徒 - 思考力と適切な判断力を身に付け、社会の進展に主体的に対応するとともに、他者と協働して豊かな地域・社会を創造する生徒	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP) - 一人一人の個性、感性及び長所を伸ばすための多様な科目選択を可能にする教育課程の編成と、ICTを有効に活用した粘り強く丁寧できめ細かな指導の実施 - 地域社会の一員としての自己有用感を持たせるとともに、主体性や協調性を育成するため、地域社会と連携・協働した体験的・実践的な活動を積極的に実施 - 思考力、判断力、表現力等を育成するための課題解決学習を中心とした探究的な学びの推進	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP) - 互いの違いや良さを理解し、互いに認め合う努力をするとともに、自らを律しつつ、他者を思いやり、他者ととともに協調する努力ができる生徒 - 自己の生き方について主体的に考えるとともに、将来の多様な進路実現に向けて学習活動、部活動、学校行事などに真面目に取り組む生徒 - 奉仕活動や体験活動等の地域活動を通して地域社会と積極的に関わり、仲間とともに人間性、社会性を高めようとする生徒

3 評価する領域・分野	◇教務部（教育課程・学習支援・授業改善・組織運営）	
4 現状の分析	○「授業をととして、学力が向上するように指導している。」の肯定的な評価は保護者等71%である。 ○「ICTを活用した学習活動や協働的な学びの機会、オンライン等での学習支援などにより、生徒の理解を高めようと努力している。」の肯定的な評価は保護者等72%、生徒76%である。 ○「熱心に学習指導・生徒指導などに取り組んでいる先生が多い。」の肯定的な評価は生徒80%である。 ○「専門的知識が豊富であり、授業内容について信頼できる先生が多い。」の肯定的な評価は生徒82%である。 ○「授業の教え方や説明が分かりやすい先生が多い。」の肯定的な評価は生徒77%である。 ○「テストの得点だけでなく、いろいろな面から学習の評価を行っている。」の肯定的な評価は生徒80%である。 ○「授業や家庭学習への指導・支援等をととして、一人一人の能力に応じた指導を行っている。」の肯定的な評価は保護者75%、生徒76%である。 ○「外部講師の講演や様々な体験活動等、授業以外の学習機会を、生徒の安全に配慮しながら、適切に提供している。」の肯定的な評価は生徒79%である。 ○「施設・設備は、学習環境の面でほぼ満足できる。」の肯定的な評価は保護者78%、生徒74%である。 ○「（2・3年次の生徒）系列や科目の選択は、自分の進路希望や興味・関心を踏まえており、意欲的に学んでいる。（1年次の生徒）系列や科目を選択することで、意欲的に学ぶことができると感じる。」の肯定的な評価は生徒96%である。 ○「系列や科目の選択が、お子様の将来の目標となっていると感じる。」の肯定的な評価は保護者78%である。 ▲「授業や家庭学習への指導・支援等をととして、一人一人の能力に応じた指導を行っている。」の肯定的な評価は保護者等67%である。 ▲「授業の教え方や説明が分かりやすい先生が多い。」の否定的な評価は生徒11%である。 ▲「施設・設備は、学習環境の面でほぼ満足できる。」の否定的な評価は生徒12%である。	
5 学校の抱える課題	◇ICTの活用について職員のスキルの向上と知識のアップデート ◇不登校生徒への学習支援 ◇ICTを最大限活用し、「個別最適な学び」の研究 ◇「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・落ち着いた授業を取り戻す。 ・「協働的な学び」と「個別最適な学び」に取り組む。 ・ICT機器を有効に活用し、主体的で対話的な授業を展開する。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 「学び方」や「学ぶ力」を身に付けさせ、「学ぶ楽しさ」を感じさせることができるように授業改善に取り組む。 (2) 「協働的な学び」を充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む。 (3) ICTを活用した教育活動および遠隔授業について、実践を通じて研究を進める。	(1) ・学校評価の「学習指導」に関係する項目で肯定的な評価が70%以上であるか。 ・授業情報を共有して落ち着いた授業を実施する (2) 授業評価アンケートで肯定的な評価が70%以上であるか。 (3) 学習支援システムの活用と年間を通じて教員間で授業交流を行う。他校（総合学科）と接続した遠隔授業を実施する。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①teamsを活用して授業情報を共有し、落ち着いた授業ができるよう生徒支援と連携をする。	①令和4年度との比較 ・R4：3年：2002件 2年：277件 1年：153件 ・R5：3年：438件(94) 2年：333件(33) 1年：167件(97) ※R5は11月現在 ()は「ほっとプレイス」利用者	A (B) C D
②e-教務で授業の欠課を把握する。早期に担任・学年・教務で連携し面談を行う。	②欠課オーバーの生徒がいないか。 ・転学2名 ・教務主任特別面談4名 (R5.11月現在)	A (B) C D
③「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価をする。	③少人数授業において、定期考查を廃止し、授業内で「知識・技能」「思考・	A (B) C D

④協働的な学びを充実するために、地域と連携した体験的な授業を行う。 ⑤ICTを活用した教育活動を行うためにICT推進部と連携する。 ⑥恵那南高校と芸術科（マンガ基礎）、郡上北高校と商業科（簿記）の授業において遠隔授業を行った。 ⑦一人一人の能力に応じた学習支援を行う。（個別最適な学び）	判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点評価を行う。 ・商業、家庭、数学、地歴公民、英語、情報で実施 ④地域と連携できたか。 ・陶芸：薪割り体験 ・ビジネス基礎：達人カップ・加登屋・ぶん福 ・栄養：トーノーデリカ ・3年総探：美濃焼おかみ塾 ・下石どえらあええ陶器祭りの参加 ・ハングル：韓国大東税務高校との国際交流 ⑤ICTミニ講座を実施したか。 ⑥他校との遠隔授業に取り組めたか。 ⑦スタディサプリを導入し活用したか。	Ⓐ B C D Ⓐ B C D Ⓐ B C D A Ⓑ C D
12 成 果 ・ 課 題	○年度初めに、教務ガイダンスを実施し、授業を大切にする姿勢を示し、教育活動全般の土台を形成するという共通認識を徹底することができた。 ○e-教務やteamsを活用し生徒情報を共有することで早期対応ができた。 ○ICTの活用を推進することができた。 ○協働的な学びを充実するために、地域と連携した体験的な授業を行うことができた。 ▲新学習指導要領になり3年目となる。系列や教育課程について改善点や課題がないか検討が必要である。 ▲本年度より「ほっとプレイス」を設置し、悩みことや授業に出ることができない生徒の対応を行った。のべ224人（R5.11月現在）が活用しており、学習支援の検討が必要である。 ▲一人一人の能力に応じた学習支援を行うため、スタディサプリを導入したがより効果的な活用の研究が必要。 ▲落ち着いた授業を取り戻すことはできてはいるが、2年生が昨年度と比較すると授業情報の件数が増えている。	総 合 評 価 A Ⓑ C D
13 来年度に向けての改善方策案 ・ICTを用いたより有効な授業を展開する。 ・ICT活用についてICT推進部と連携し、研修を継続して行う。 ・地域や外部と連携し「協働的な学び」を充実させ、「主体的・対話的で深い学び」ができる授業改善に取り組む。 ・新学習指導要領となる新3年生の科目の観点別評価を確立する。 ・スタディサプリを導入の教員研修を行い、一人一人の能力の応じた学習支援につなげる。また、保護者にもスタディサプリの活用がわかるように「スタディサプリ for parents」の活用を勧める。 ・年間を通じて他の教員の授業を参観し、お互いに学びを深める。		

3 評価する領域・分野	◇研修部（資質向上・教育資源活用）	
4 現状の分析	○職務への意識・責任感が高く、協力的姿勢がある。 ○特別教室を含め、ICT活用への環境が整っている。 ▲事務処理の期限・約束事の順守などを徹底しきれない。 ▲ICTアプリへの理解が高いとは言えず、十分な活用ができていない。	
5 学校の抱える課題	◇安全意識・環境整備・保護者対応など、教育活動の礎でありながらも、高い意識を維持することが難しい事項の再認識をすること。 ◇より有意義な教育活動につながる可能性のあるICTアプリへの理解を浸潤させること。	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・校内安全を中心として、教育活動の基礎的事項への意識を高める。 ・今年度から導入したICTアプリであるスタディサプリへの理解を深める。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) グループウェアを活用することで、校内安全への意識喚起を中心として、教員が相互に情報を共有することができるようにする。 (2) スタディサプリへの理解を深めることができる手引書を提供したり、研修会を実施したりすることで、理解と利用の浸潤を図る。	(1) 時宜を逃さず、グループウェアに情報を提供することができたか。その情報に対して、教員から反応を得ることができたか。 (2) 他の教員が見て、わかりやすい手引書を作成することができたか。教員や生徒がスタディサプリを利用する機会が増えたか。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①グループウェアの「電子会議室」に、様々なトピックを作ったり、「回覧」を活用したりして、その中に教育活動、とりわけ校内安全に関わる情報を適宜提供した。 ②グループウェアの「回覧」で、「スタディサプリの活用」という投稿を定期的に行った。10月には研修会を実施した。	①教育活動全般に関わる今日の情報、とりわけ校内安全にかかわる情報を遅滞なく提供することができたか。 ②スタディサプリという新しいアプリへの抵抗感を漸減できるような内容を、教員の負担感を抑えながら提供することができたか。	A (B) C D A (B) C D
12 成果・課題	○既存のツールである「電子会議室」を有効に活用することで、教員の負担感を増すことなく必要な情報を提供し、職員の共通理解と意識を醸成することができた。とりわけ、校内安全という最も大切なことでありながら、意識が希薄になりがちな側面への再投射をすることができた。 ○スタディサプリの構造と操作性についての基礎的理解を浸潤させることができた。入り口として教育インフラとしての「連絡」機能を積極活用する事例を紹介することで、多様な利用価値を周知することができた。 ▲「電子会議室」には、時宜に応じて様々な情報を提供したが、その情報に対して更なる投稿をしてくれる職員が限られてしまった。情報共有のプラットフォームとして、より認知度と親近感を高めていけるとよかった。 ▲スタディサプリの積極活用という変化を生じさせることはできなかった。情報を得て、それを行動に移すまでの魅力を提示することができなかった。	
13 来年度に向けての改善方策案	・今年度から新設された「研修部」の在り方そのものを、より具体化し洗練された状態にする。校内における研修部の立ち位置を確立する。 ・職員が研修部に求めるニーズを的確に把握し、ニーズに合った研修内容を提供する。 ・職員と生徒、更には保護者に対して、年度当初の初期段階で、スタディサプリへの認知度を上げるための機会を持つ。ログインすることなど、初歩的な段階での障壁を取り除いて、スムーズな活用への整備をする。 ・スタディサプリに教育コンテンツが存在する教科と「総合的な探求」「産業社会と人間」の時間において、スタディサプリを活用する年間計画を作成してもらい、年間の教育活動の中にスタディサプリを位置づけてもらう。	

3 評価する領域・分野	◇ I C T 推進部 (学習支援・I C T活用・組織運営・広報)		
4 現状の分析	○「学校は、ホームページ等を用いて、保護者（地域）へ様々な情報を速やかに伝えている。」の項目に対して、肯定的評価が保護者 87%、生徒が 85%である。この結果は、学校が情報発信に力を入れていることの証である。ホームページは、学校の教育方針や活動内容、行事予定などを随時更新しており、保護者や生徒にとって有益な情報源となっている。 ▲「学校は、I C Tを活用した学習活動や協働的な学びの機会、オンライン等での学習支援などにより、生徒の理解を高めようと努力している。」の項目に対して、肯定的評価が保護者71%、生徒が76%である。		
5 学校の抱える課題	◇「授業でタブレット端末をもっと活用したい。」の項目に対して、活用を望む生徒は65%であり、それらの生徒の声に応えるためには、教員の情報活用能力の向上が必要である。		
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・職員の情報活用能力の向上を図る。 ・在校生やその保護者はもちろんのこと、入学希望者やその保護者または地域の方々に対して、ホームページを通して学校の雰囲気やカリキュラムを把握できるようにする。		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 職員会議の中で、I C T推進部から職員に対してミニ講座を行い、情報活用能力の向上を図る。 (2) ホームページを随時更新し、その更新内容についてすぐにメールを活用して周知徹底を行う。	(1) 学校評価の「授業におけるICT機器の活用」に関する項目で、肯定的な評価が80%以上であるか。 (2) 学校評価の中で「ホームページの情報伝達」に関する項目で肯定的評価が80%以上であるか。また、夏季学校見学会、秋のオープンキャンパスそして入学後に行うアンケートで本校を志望した理由にホームページを参考にしたか調査する。		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
①毎月の職員会議の中で、ミニ講座を行った。具体的には、teamsの「会議立ち上げ方法の紹介」「生徒を含めたチームの作成方法の紹介」、校務支援マクロの紹介、複合機の機能の紹介、百問繚乱の紹介等。 ②恵那南高校と美術（マンガ）の分野で3回の遠隔授業を実施した。この授業では、生徒たちが自分の作品を映像に収め、連携校と共有することができた。加えて連携校の生徒たちからは、作品に対する感想やアドバイスが寄せられ、生徒たちは互いに刺激を受けた。 ③ホームページに学校生活の様子を随時更新し、来客者にはサイネージでスライドショーを見せ、学校の情報を発信した。	① I C T機器を活用して授業を行うことができたか。 各行事において、teamsで生徒と連携し行事を成功させることができた。 ②遠隔授業に対して肯定的な評価が70%以上であるか。 遠隔授業の後に取ったアンケートでは肯定的な評価100%であった。 ③高校見学の際に、本校に志望を決めた理由の中にホームページが入っているか。校内アンケートでの肯定的評価が80%以上であるか。 校内アンケートでは肯定的評価が保護者87%、生徒が85%であった。	A B C D A B C D A B C D	
12 成果・課題	○昨年度、授業ごとにteamを作成して共同作業をすることはなかったが、今年度は生徒教員間でチームを作り共同作業を行い、写真の共有や資料の共有を行った。 ○ホームページの更新頻度を上げたことで、ホームページの閲覧者数が昨年度比約136%（11月現在）となり、学校の情報を在校生、保護者だけではなくより多くの地域の人に伝えることができた。 ▲授業においてメタモジクラスルーム、manabaなどを用いた「個別最適な学び」の実践が不十分である。 ▲遠隔授業も情報担当者が授業のセッティングを行う必要があり、遠隔授業を誰もが実践できる水準には未達である。		総合評価 A B C D
13 来年度に向けての改善方策案			
・現在、メタモジクラスルーム等のI C T教育ツールが活用できていない授業について、理由と改善策を検討する。 ・I C T教育ツールの利用は、学習者の主体性や協働性を高めるとともに、教員の授業評価やフィードバックを効率化することができる。しかしI C T教育ツールの導入には、教員や学習者の情報活用能力やデジタルリテラシーの向上が必要である。そこで、次年度は以下のような取り組みを行う。 ① I C Tミニ講座の開催：教員や学習者に対して、メタモジクラスルーム等のI C T教育ツールの使い方や活用方法を定期的に紹介する。 ②研修での知見共有：教員間でI C T教育ツールの導入事例や効果的な活用法を共有し、授業改善に役立てる。			

3 評価する領域・分野	◇生徒支援部（生徒指導・教育相談・）	
4 現状の分析	○学校行事に前向きに取り組むなど、活発な生徒が多い。 ▲学校のルールを守れない生徒が多く、学校全体が落ち着かない。また、それに対して、組織での指導・支援体制に、改善の余地がある。	
5 学校の抱える課題	◇授業や部活動など、日常生活を前向きに取り組みたい生徒が、頑張れない環境になってしまっている。ルール・マナーを守ることの大切さを理解させ、落ち着いた学校を取り戻すことが課題である。	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・落ち着いた学校を取り戻す。安全・安心・信頼・応援される学校づくり。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 社会性と規範意識を高める (2) 安全・安心な学校環境を整える	(1) 独自の生徒アンケートを実施した結果「昨年度と比較し、挨拶をする意識は向上しましたか」で「はい」が86%。「昨年度と比較し、身だしなみを整える意識は向上しましたか」で「はい」が82%。 (2) 同様に「昨年度と比較し、落ち着いて授業に取り組めていますか」で「はい」が81%。「昨年度と比較し、安心して休み時間を過ごすことができますか」で「はい」が86%。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①朝の挨拶活動を通じて、身だしなみ指導も実践した。また、身だしなみ指導については、身だしなみ確認を全校で体育館にて実施することで、生徒・職員の認識を学校全体で統一した。 ②予防的、啓発的生徒指導に努め、何か問題が起きる前に、生徒に呼びかけることを心がけた。また、問題が生じた際も、素早い組織対応を実践した。 ③教育相談室に加え、ほっとプレイスを設置し、不安や悩みを抱えた生徒を受け止める場所をつくった。	①挨拶活動や身だしなみ指導を通じた人間教育をすることができたか。 ②ルールやマナーを守ることの意義を理解させ、落ち着いて授業に取り組むことができる環境をつくれたか。 ③ホットプレイスを活用し、不安や悩みを抱えた生徒の、心の居場所を確保できたか。	A (B) C D A (B) C D A (B) C D
12 成果・課題	○ルールやマナーを守る意識が向上した生徒が多く、全体として落ち着いた学校生活を過ごすことができる。 ○部活動や学校行事に積極的に取り組むことができる生徒が多くなった。 ▲ルールやマナーを守ることにに対する意識の更なる向上を目指すと共に、より生徒を育ていくこと。	総 合 評 価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策 ・落ち着いた状態を確かなものとし、より活気のある学校づくりを目指していく。 ・授業、部活動、学校行事、課外活動など、様々な場面での人間教育により力を入れていく。		

3	評価する領域・分野	◇ 特別活動部 (特別活動・学校行事・生徒会)	
4	現状の分析	○R4年度3年生の卒業アンケートの、球技大会、文化祭に関して「満足・どちらかという満足」が全体の68%という結果から、多くの生徒が楽しめる文化祭を運営することができている。 ▲部活動に関しては「満足・どちらかという満足」が全体の55%とやや低い結果となっており、本校における部活動の盛り上げが今一つと感じる。	
5	学校の抱える課題	・生徒が主体となった学校行事の運営 ・活気ある部活動	
6	今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇学校行事、部活動の充実 ◇生徒会執行部のリーダーとしての育成	
7	目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
	(1) 各学校行事における生徒会執行部との会議 (2) 部活動の活動報告 (HPへ掲載)	(1) 球技大会、文化祭の満足度80%以上であるか。 (2) 部活動の満足度が70%以上であるか。	
9	取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
	【学校行事】 ・紅陵祭(文化祭)、球技大会(春秋2回実施) ・東濃特別支援学校とのオンライン共同学習 ・ボランティア活動……MSリーダーズ活動 (地域清掃・ハローモーニング・あいさつデー・土岐市駅前啓発活動・総文祭補助役員) 【部活動】 ・ウエイトリフティング部……インターハイへの出場	①アンケートで学校行事に対して肯定的な評価が70%あったか ②アンケートで部活動に対して肯定的な評価が70%あったか	A (B) C D A (B) C D
12	成果・課題	○生徒会執行部の積極的な学校運営参加 ・文化祭の生徒会企画の発案→実施 ・生徒開発案による、球技大会のチーム編成の変更 ○各行事の活動報告 (HPへの掲載) ※部活動も同様 ○部活動間の交流 (サッカー部の試合に野球部の生徒が出場) 合同トレーニングの実施 (サッカー、バスケ、野球、ウエイトリフティング) ▲部活動の加入率が低い	
13	来年度に向けての改善方策案	総合評価 A (B) C D	
	・生徒会執行部がより学校運営に参加できる環境づくり ・部活動加入率の向上 (対面式でのPR等)		

3	評価する領域・分野	◇進路支援部（進路指導・キャリア教育推進）		
4	現状の分析	・「生徒に適した進路情報を示し、生徒の可能性を引き出そうとしている」の肯定的な評価は生徒81%である。 ・「生徒の将来の希望に沿った具体的な進路指導が行われている」の肯定的な評価は生徒83%、保護者等79%である。 ・「進路説明会等、保護者が必要とする進路情報を提供する場を設けている」の肯定的な評価は保護者等75%である。		
5	学校の抱える課題	・多様な進路希望に対する対応。		
6	今年度の具体的かつ明確な重点目標	・キャリア意識の向上と自己肯定感の醸成を目指す教育活動を推進する。 ・生徒の生き方、在り方指導を中心として、生徒自身の生活や人生を考え、誇りある進路選択ができる能力や態度を育てる。		
7	目標の達成に必要な具体的な取組		8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 総合学科の特色を活かし、3年後を見通し、早期から進路実現のために高い意識を持たせられるよう進路行事の充実を図る。 (2) 各学年、分掌と連携し、進路実現に向けた継続的な進学補習、小論文・作文指導、面接・マナー指導等、幅広い知識習得のための指導を充実させる。 (3) 生徒一人ひとりが特性と適正を生涯にわたって生かせるよう徹底して各生徒と向き合い、保護者とともに考える。		(1) 学校評価の「進路指導」に関係する項目で肯定的な結果が生徒・保護者とも80%以上であるか。		
		(2) 学校評価の「進路指導」に関係する項目で肯定的な結果が生徒・保護者とも80%以上であるか。		
		(3) 就職・進学において進路実現100%。		
9	取組状況・実践内容等		10 評価視点	11 評価
①ハローワークガイダンス、労働基準監督署ガイダンス 多治見法人会面接指導、リーガルマインドガイダンス 上級学校見学会、企業見学会、卒業生と語る会、合同企業説明会、校内進路ガイダンス ②2、3年生進学補習（国語、数学、英語各週1回）、 上級学校入試、就職試験における個別指導 ③対面による生徒個別指導、対面、電話による保護者との懇談		①アンケートで肯定的な評価が80%以上であったか。 ・生徒に適した進路情報を示し、生徒の可能性を引き出そうとしている。 81%(生徒)	A B C D	
		②アンケートで肯定的な評価が80%以上であったか。 ・生徒の将来の希望に沿った具体的な進路指導が行われている。 83%(生徒) ・生徒の進路希望に沿った適切なアドバイスをしている。79%（保護者）	A B C D	
		③就職、進学実績 ・進路説明会等、保護者が必要とする進路情報を提供する場を設けている 75%(保護者) ・R6年12月末現在就職98%、進学92%	A B C D	
12	成果・課題		総合評価	
○進学、就職の場面で、生徒、保護者、担任、進路支援部担当者との懇談により、保護者とともに生徒の進路を考える機会を持つ場面を設けることができた。 ○2年次生徒において、進路に関する相談や進路実現に関する具体的な行動をする生徒が増加した。 ▲学年団、各教科と連携をして公務員指導を行ったが、行き届かなかった部分が若干ある。		A B C D		
13	来年度に向けての改善方策案			
・上級学校入学試験において、個別指導により、学力を向上させる指導の充実を図る。 ・公務員試験に対応した就職指導の充実を図る。				

3 評価する領域・分野	◇活性化推進部（地域連携・総合学科教育・広報活動）		
4 現状の分析	・地域との連携活動・総合学科としての取り組み ○「地域連携のよる活力ある高校づくり推進事業」の取り組みとして、昨年度、実験的に一部の部活動や有志の団体で下石町窯元まつりへ参加した。 ○下石陶磁器工業協同組合や美濃陶磁歴史館など、産業社会や文化・歴史の観点から見ても素晴らしい地域資源がある。 ▲地域と連携した学校活動を持続可能なものにするための授業計画や人的な態勢が十分に整っていない。 ・広報活動 ○スクールガイド制作・夏休みマンガ講座・夏の体験入学・秋の高校見学会・高校フェアなどの中学生向けの広報活動、およびHPの更新を行っている。 ○美術・工芸系列の強みを生かした広報物の作成や、総合学科の多彩な科目を目玉にした中学生向けイベントを開催することができる。 ▲本校への進学希望者数増加をめざした戦略的な広報活動になっていない。 ▲活動を持続可能なものにするための、それぞれの役割分担を適切に行う。		
5 学校の抱える課題	◇体験活動を通した協働的な学習の機会が少ない。豊かな地域資源があるが、十分に生かしきれていない。 ◇総合学科としての本校の魅力を十分に伝えることができていない。		
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・地域連携のよる活力ある高校づくり推進事業の取り組みの充実 ・積極的な広報活動による、土岐紅陵高等学校の認知度の向上		
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 窯元まつりへの参加を基軸とした地域コミュニティとの連携 (2) 各種広報物の発行や、各種中学生向けイベントの充実	(1) 生徒による成果報告書等 (2) 中学生3年生の進路希望調査における値		
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価	
・学校行事として下石町窯元まつりへ参加。 ①1年次（窯元巡り） 地域の陶磁器産業への理解を深める。 ②2年次（あそびのひろばの運営） 地域コミュニティと積極的に関わり、協働することで地域社会の一員として、自己有用感を持つ。 ③3年次（課題解決学習） 地域課題に目を向け高校生らしい感性でアイデアを出し、地域資源を生かした探究をする。 ・広報活動 ④スクールガイド制作・夏休みマンガ講座・夏の体験入学・秋の高校見学会・高校フェアなどの中学生向けの広報活動、およびHPの継続的な配信をする。	①全校態勢で学校行事として地域のまつりに参加できたか。 ②生徒は地場産業である美濃焼の歴史や文化を知り、地域産業について理解を深めることができたか。 ③生徒は協働活動を通して自己有用感を高めることができたか。 ④本校の魅力を中学生や保護者に伝えることができたか。	- A ☒ B C D ☒ A B C D - A ☒ B C D ☒ A B C D	
12 成果・課題	・学校行事として下石町窯元まつりへ参加した。 ○1年次：この地域の陶磁器産業への理解の深まりがみられた。（生徒の成果報告より） 2年次：地域コミュニティと積極的に関わり、協働することで地域社会の一員として、自己有用感を持つことができた。（生徒の成果報告より） ○窯元まつりへの参加を基軸とした地域コミュニティとの連携について一步を踏み出せた。 ○窯元めぐりはこの地域の陶磁器産業への理解の深まりがみられ、「産業社会と人間」科目の学習内容としてその教育効果は大きいものであった。あそびのひろばについても体験活動を通した協働的な学習の機会創出となった。 ▲今年度は3年生のまつりへの参加ができなかった。 ▲あそびのひろばについて、今年度は運営のみであったため、生徒の主体性が弱かった。 ○3年次：地域課題に目を向け高校生らしい感性でアイデアを出し、地域の方と対話を重ねてインスタアイコンの制作や、共同研究するなど、地域資源を生かした探究をすることができた。（課題解決学習発表等の成果発表より） ▲各種活動の運営方法は検討の余地があり、特に地域コミュニティとの継続的な対話の場を設ける必要がある。		
	総合評価 A ☒ B C D		

13 来年度に向けての改善方策案

- ・「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」の科目の充実

- ①キャリア学習
- ②進路探究
- ③地域探究

を3つの柱とし、地域連携による体験活動を通じた協働的な学習を明確に位置付けたの授業計画、およびその運営を円滑に行う体制づくりをする。

3	評価する領域・分野	◇ 渉外活動 （広報活動・生徒募集）				
4	現状の分析	▲中学校の先生方との綿密な情報交換が、全く出来ていない。				
5	学校の抱える課題	◇多様な進路実現に向けて、学習活動・部活動などに真面目に取り組める生徒をいかにして入学させるか。				
6	今年度の具体的かつ明確な重点目標	・総学科の長所を、我々教職員がもっと知る必要がある。それをいかにして地域に浸透させるかが、重要である。 ・教員が学校外の状況、地域の中学生の状況について、もっと意識を高く持ち、知る必要がある。				
7	目標の達成に必要な具体的な取組					
(1) 定期的に学校通信を中学校へ配信する。 (2) 夏のオープンキャンパスの方法を、4月中に決定する。 (3) 夏のオープンキャンパスのチラシ、6月に配布する。						
9	取組状況・実践内容等	10	評価視点	11	評 価	
・年間を通して、中学校進路指導主任との情報交換を行う。 ・夏のオープンキャンパスへの、中学生参加の増加。 ・夏のオープンキャンパス時、総合学科特色の周知。		①校内で、活性化推進部長との連携は取れた。 ②中学校教員との連携は2/3はうまく取れた。 ③オープンキャンパスへの動員数は、地域の生徒数減の中でも微増した。		A	Ⓐ B C D	
				A	Ⓐ B C D	
				Ⓐ	A B C D	
12	成果・課題				総 合 評 価	
○ほぼ思い通りに、中学校訪問に行けたので、成果につながった。 ○秋の中学生の志願状況から、定員を超過する受検者を迎えられるものと考えられる。 ▲校内では、渉外活動を疑問視する声があった。					A	Ⓐ B C D
13	来年度に向けての改善方策案					
・渉外活動と活性化推進部との綿密な連携が、さらに必要となる。 ・渉外活動は、全教職員の協力が必要である。 ・自由に渉外活動をできる環境をさらに高めたい。						

3 評価する領域・分野	◇ 1 年学年会 (学年運営・学習指導・生徒指導・進路指導)				
4 現状の分析	○「学校生活に関するアンケート」の授業や学校行事への取り組みについて、7割以上が肯定的な回答をしており、多くの生徒は前向きに学校生活を送ろうとしている。 ▲身だしなみが整っていない生徒が少なからずいる。				
5 学校の抱える課題	◇「学校生活に関するアンケート」の「土岐紅陵高校の生徒であることに『自信と誇り』をもつことができていますか」の項目に「はい」と回答した生徒の割合が他の項目よりも少し低く、特に自分が苦手とする事に対して消極的になってしまう傾向がある。				
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・高校生活における基本的生活習慣と学習に取り組む姿勢を身に付けさせる。 ・クラスの一員としての自覚を持たせ、土岐紅陵高校への帰属意識を高め、自己理解と自己実現のために主体的に学校生活に取り組む生徒の育成を図る。				
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標				
(1) 遅刻、早退、欠席をさせない。また、高校生らしい身だしなみについて考えさせ、良識あるマナーや言葉遣い、挨拶ができるよう指導する。 (2) 基礎的・基本的な学力の定着を図るとともに、授業規律の徹底を図る。 (3) 日々の活動や学校行事等を通して、学校やクラスへの帰属意識を高めるとともに、自主性・協調性・責任感・連帯感を育成する。	(1) 学期または月ごとの欠席数等の変化、および年度末の自己評価や反省、担当職員による評価をもとに、達成状況を判断する。 (2) 定期考査等の結果、および担当職員による評価をもとに、達成状況を判断する。 (3) 行事ごとに実施されるアンケート等の結果・および担当職員による評価をもとに、達成状況を判断する。				
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価			
①担任との面談やHR活動の時間・職場体験学習等で、基本的生活習慣の大切さを考えさせ、自分自身を振り返らせることで、改善を図る。また、身だしなみ確認とその事後指導を行う。 ②教科担任や教務部・生徒支援部と連携をとり、授業の大切さを認識させる。 ③紅陵祭や球技大会等を通して、クラス等への帰属意識を高めるとともに、自主性・協調性・責任感・連帯感を育成する。	①職場体験学習等のアンケート結果の分析や面談を通して、生徒の状態を把握する。 ②落ち着いた雰囲気の中で授業ができているか、また、定期考査等の結果により、基礎学力の定着度合いを把握する。 ③行事ごとのアンケート結果等により、達成感と成就感を把握する。	A (B) C D A (B) C D A (B) C D			
12 成果・課題	○演劇ワークショップが年度当初に実施されたため、早い時期にクラス内の連帯感を形成することができた。 ○高校生活に慣れ、学校生活全般において落ち着いた態度で取り組むことができています。 ○正副担任、教育相談、部顧問、スクールカウンセラーが連携し、生徒や保護者の悩みや困りごとに細やかに対応することで、安定した学校生活につなげる取り組みができています。 ○各種行事に対して、充実した活動ができた。 ○職場体験学習を通して、言葉遣いやマナーの大切さについて考えさせることができた。 ▲進路研究による具体的な目標を意識した上で、継続的な学習習慣を身に付けることの大切さを理解させる。			総合評価 A (B) C D	
13 来年度に向けての改善方策案					
・進路に関する具体的な情報を効果的に提示することで、自分自身を分析させ進路の方向性を決めさせたい。 また、具体的な目標を意識した上で、好ましい身だしなみを意識させるとともに、継続的な学習習慣を身に付けることの大切さを理解させたい。 ・修学旅行や学校行事を通して、助け合ったり切磋琢磨しあったりできるような人間関係を築かせたい。					

3 評価する領域・分野	◇ 2 年学年会 (学年運営・学習指導・生徒指導・進路指導)		
4 現状の分析	▲基本的な生活習慣が身についておらず、制服を着こなしたり身なりを整えたりするなどの、自己管理ができていない。 ▲自己有用感が乏しく、成功体験が少ないため学習や部活動、学校行事に対して意欲的に取り組むことができない。主体的に取り組む姿勢を育成していくことが必要である。		
5 学校の抱える課題	◇3年間のコロナ禍で身についた時間に対するルーズな感覚、出席に関する意識の低迷がみられる。 ◇携帯電話 (SNS・ゲーム等) に対する依存度が高く、基本的なコミュニケーション能力が低い。		
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・高校生活における望ましい生活習慣と学習習慣を身につけさせる。 ・2年次生の一員としての自覚を持たせ、土岐紅陵高校への帰属意識を高め、自己実現のために主体的に学校生活へ取り組む生徒の育成を図る。		
7 目標の達成に必要な具体的な取組		8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 教務部、進路指導部、生徒指導部等、各分掌との連携。 (2) 保護者及び他学年との共通理解。 (3) 生徒に対する具体的な説明と対話。		(1) 定期的に行われる「身だしなみ確認」において継続指導及び要観察に該当する生徒の減少。 (2) 集団の中の一員としての発言や行動がとれる。 (3) 進路実現に向けた意識の向上と学習への取組み。	
9 取組状況・実践内容等		10 評価視点	11 評価
①定期的に「身だしなみ確認」を実施して自覚を持たせるとともに、自主的に改善方法と計画を提示させるようにする。登校時における声掛け運動を徹底し、自ら意識して行動できるように促す。 ②修学旅行、文化祭、遠足、球技大会、地域連携行事 (窯元まつり) など、学校行事に対して計画的に自主性をもって取組ませ、コミュニケーションの機会を多く持つ。 ③定期考査等に向けての早期取組みや、スタディサプリの活用による基本的学習習慣の確立を促す。		①春先に見られた頭髪の乱れは概ね無くなった。また、制服を着こなすことができるようになり、身だしなみに関する意識が高まってきた。 ②「ルールの中で楽しむ」をテーマに取組んだが、修学旅行をはじめ、問題が発生するたびに自分たちで解決しルールの中で楽しむことができた。 ③定期考査に向けての取組みは積極的に行ったが、安易な欠席など考査への意識の欠如と学習に対する必要性の理解が十分とは言えない。	A (B) C D (A) B C D A B (C) D
12 成果・課題	○頭髪や制服の着こなしについては、多くの生徒が自覚を持ちその必要性を理解して行動することができるようになってきた。 ○まだまだ課題はあるが、他人を思いやる心が芽生え始め、集団の中の一員としてコミュニケーションを持ちながら行動することができるようになってきた。 ▲成功体験に基づく自己有用感を体現させることが少なかった。 ▲自分の将来についてしっかり向き合い、計画的に力 (学力・表現力など) を付けるための行動がとれなかった。		総 合 評 価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策案			
・5年後、10年後、20年後の自分を想像させ、そこから引き算方式で準備しなくてはいけないこと、今やらなければいけないことを考えさせ、進路実現に向けた具体的な取組みを計画させる。 ・身の回りにある事象からその本質を考えさせ、自ら行動し解決する力を付けさせる。 ・部活動や学校行事において、自分の立ち位置 (存在意義) を理解させ、小さな一歩からでも行動し参加する意識を持たせる。			

3 評価する領域・分野	◇ 3 年学年会 (学年運営・学習指導・生徒指導・進路指導)	
4 現状の分析	○素直な生徒が多く、指導には真面目に向き合える。 ▲様々な経験の少なさも、自信がなく、積極的に取り組みことが少ない。	
5 学校の抱える課題	◇最上位学年となって、入学後これまで見てきた3年生が、手本となるべき行動をしてこなかったことから、自分たちがどのような行動をすべきなのかを、自ら考えていかなければならない状態である。 自分たちが、土岐紅陵高校を再構築する立場であることを、少なからず認識しており、その行動が全体としてとれるように指導していくことが教員の役割であると考えられる。	
6 今年度の具体的かつ明確な重点目標	・生徒が個々の進路決定を進める中で、社会人として必要な資質を理解し身に付けさせる。 ・この指導の中で、土岐紅陵高校における3年次生徒としての立場を理解した行動がとれるように指導する。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 学年集会の際に、3年生としての在り方を話す。 (2) 進路別学習(産業社会と人間・課題解決学習)の際に、進路に合わせた、3年生としての在り方について話をします。	(1) 生徒の行動や発言も見て、逐次再指導等を検討して学年集会の開催を進めていく。 また、個人的の指導も行っていく。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①コロナ感染予防が解除されるとともに、欠席や遅刻をしないなど、基本的な生活習慣の確立を呼びかける。 ②各自の進路に合わせて、就職試験内容も考慮しつつ、定期考査を含めて、学習に力を注ぐように指導する。(自学ノートの活用) ③行事ごとに、3年生としての自覚を持って行動をするように呼び掛ける。	①ほぼ全員の生徒が、自覚を持った出席を行うことができた。一部に、欠席がちな生徒が出てしまった。 ②12月までにほぼ全員の進路が確定した。また、欠点を取る生徒も後期になり減少した。 ③3年生らしい行動ができ、各行事が締まった形で実施された。	A (B) C D (A) B C D (A) B C D
12 成果・課題	○長いコロナ期間中に、欠席に対する感覚が平常でなくなってしまった(少しでも体調が悪ければ自宅待機)状態から、普通の感覚(休まない。遅刻早退をしない)に多くの生徒が、早い時間で戻ることができた。 ○3年生としての自覚を持った行動が取れる生徒が多くいた。 ▲一部に、欠席が多くなったり、遅刻や早退を繰り返したりする生徒がみられ、保護者召喚で指導への協力をお願いした。	
13 来年度に向けての改善方策案	・今年と同様に、年度当初より、基本的な生活習慣の確立に向けて職員全体で取り組む、このことで、学校全体が落ち着いた雰囲気の中で1年間過ごしていけるベースが完成する。	

Ⅱ 学校関係者評価

実施年月日：令和5年9月13日・令和6年1月19日

【意見・要望・評価等】

- 演劇WSなどの、わかりやすい「学校らしさ」があるのは魅力的である。
 - どの中学からも本校の教職員の対応が良いとの評価を聞いている。
 - 活性化推進部の企画に特色があって良い。
 - 校長先生を始め、先生方から学校を良くしようとする思いが伝わってくる。授業は、先生方の授業も覇気があり、よく展開が考えられている。
 - 保護者としては、生徒が楽しそうにしていることが何よりである。本校と家庭が協力連携して、生徒に学習としつけを定着させたい。
 - 生徒は素直で、街中でも気さくに話しかけてきたり、挨拶をしてくれたりする。以前の本校と比較して見直した感がある。
 - 進路支援部については、目標持たせてその実現に向けて取り組ませているのが良い。
 - 様々な指導に大きな力を注がなければいけない時期もあったようだが、本校がそのことにしっかり向き合ってきたことが窺える。
 - 本校は一人一人の生徒は社会性を身につけていて、生活が安定している。集団になったとき馴染まない生徒がいてと学級、学校が落ち着かない。個別の生徒とどれだけ話ができているか。本校の現状を見るとそれができていると感じられる。
 - ・PTAの全国大会に参加した際に、地域との交流が大切であるとの話があった。PTAと本校が、地域の方々と交流できるような活動を展開したい。
 - ・生徒支援部のマナーとルールの順守については、必要な理由を理解したら生徒は受け入れると考える。一方的な説明だけでは受け入れ難いかもしれない。
 - ・朝のSHRを実施しない校時に変更したが、登校時の安全確認は重要であり、1限の授業担当者とHRTが連携して引き続き確実な登校確認をお願いする。
 - ・厳しいだけの生徒指導では、時代にはそぐわない。学校としての指導の手段が奪われる一方で、生徒の自己責任が大きくなっている。本校は、様々な指導を調和させながら、粘り強く指導していることが理解できる。
 - ・地域の祭りの実行委員会だけでは発信力がないので、本校が関わることでPR活動やSNS発信等に力を貸してほしい。
- △各分掌の自己評価では、前年度と比較して改善したことを伺うことができた。校内に、「これだけは実行する」といった具体的な改善点の共有化ができると良い。
- △定期考査等で、学力差に開きがある。習熟度の低い生徒への指導、宿題等を位置付けてほしい。また、部活動加入者が少ないので、活動しない生徒の生活のリズム等が心配である。部活動の活性化を望む。
- △冬の女子の制服の着こなしが、地域では「自由でいいね」と勘違いが起きている。
- △「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」の3年間を通したビジョンを示せると良い。